

中国雲南をコアとする東ユーラシア交易圏の動態的研究

研究代表者 立教大学文学部 教授 上田信

1. 研究目的

「東ユーラシア」は、それまであまり使用例のない言葉であるが、中国を中心としてシベリア高原東部・モンゴル高原・チベット高原・朝鮮半島・日本列島・琉球列島・台湾・東南アジア全域およびベンガル湾岸のインドを包摂する地域として、あらたに提起するものである。

近年、杉山正明氏がモンゴル帝国史において画期的な組み替えを行った^[1]。従来、野蛮で略奪的な遊牧民の帝国と考えられていたモンゴル帝国が、中央ユーラシアを貫通する陸の交易と、東シナ海・南シナ海とインド洋とを結ぶ陸の交易とを結びつけ、ユーラシア大陸とアフリカ西海岸の大半を包摂する巨大な交易圏を構築したと評価されるようになった。しかし、杉山氏の研究では、モンゴル帝国の盟主であった元朝が中国から駆逐されたあと、中国で相次いで生じた明朝と清朝への評価は低く、時代の流れを後戻りさせたといった評価が下されている^[2]。本研究の起点は、モンゴル帝国史の発展を受けて、明清時代をどのように組み替えるのか、という問題意識^[3]に置かれている。

明清時代の歴史を検討すると、モンゴル帝国成立後の中国史を論じる枠組みとして、現在の中華人民共和国の領土、あるいは一般的用法による「東アジア」(中国大陸・朝鮮半島・日本列島)では不十分であることが明らかになる。古代から宋代にいたる時代には、中国はその周辺地域と比較して、隔絶された文明の高さを有していた。遊牧系の民族が建てた王朝に中国が組み込まれることがあったとしてもその優位は変わらず、中国文明は支配者となった異民族の文化をも吸収しながら、自己拡大的に成長してきた。ところがモンゴル帝国の成立により、中国はユーラシアをめぐる次元の高い交易システムに包摂され、そのシステムのなかの諸要素の一つとして位置づけ直されることとなった。こうしたモンゴル帝国後の中国史を捉えるために、あらたなシステムの連関を持つ空間として、東ユーラシアというあらたな範囲を提起する。その範囲としては、当初は、日本海・渤海・黄海・東シナ海・南シナ海の五つの海、およびこれらの海に接する陸地や島嶼から構成される空間であるとしたが、本研究プロジェクトの進展とともに、結論として、五つの海にあらたにベンガル湾を加え、この海に囲まれる範囲とすることとなった。また、東ユーラシアの中心に位置する雲南に研究の焦点をあてることで、新しい歴史像を提示する上で有効であることが明らかとなった。

2. 研究プロジェクト実施状況の概要

本研究助成によって、まずこれまでの到達点を明らかにするため、研究蓄積を整理するとともに史料・文献を追加し、一般読者向けの概説書を執筆した^[4]。5月には雲南と中国内陸部、日本などとも密接に関わる銅をテーマとして、雲南省東部の会沢市(旧・東川府)を調査した。7月にはモンゴル高原と雲南とを南北に結ぶ文化伝播ルートを解明する手がかりを得るため、青海省黄南チベット自治州において、アムド=チベット族の宗教活動をフィールドワークの手法によって調査した。8月には他の資金に依るもの^[5]であるが、明清時代に漢族系商人が拠点を置いた建水県と石屏県において、史跡調査を行った。9月には四川省と雲南省とを結ぶ交易路を調査するため、雲南省西北部から四

川省西部の稲城県を訪問した。

雲南省を中心に交易路を確認するなかで、東ユーラシアが当初に予想していた以上に緊密な連携を有していたことが明らかとなった。刊行された史料を収集するとともに、各地に残存する碑文を筆写し、歴史研究を進める基盤を固めることができた。

3. 雲南省銅交易路調査

4月29日から5月9日にかけて行った会沢市における調査では、会沢市内に点在する銅業に深く関わる商人グループが建造した会館を訪ねた。

市街地の西に位置する江西会館は、木を装飾的に積み上げた壮麗な造り。江西の南昌にある万寿宮を模したであることが、明らかである。この事実からは、銅業に関わる江西商人は、おもに省内北部の出身者であることが推定される。これまで漠然と江西商人ネットワークが行っていたと捉えられていた雲南銅業への資本投下について、江西南部の商人グループと区分して検討する必要性がある。会館の片隅の壁に埋め込めこまれた石碑のなかに、乾隆四七年のものがあり、銅の運搬に絡むもので興味深い。読み取れない字が多いが、分かる範囲で書き写す。仁廉蕭大老爺と呼ばれる人物が、東川から北京へ銅を運送する負担を肩代わりしたことを顕彰しているもので、碑を建てた名義には、紳士の他に、運送業の「行頭」や実際に荷を運んだ「脚戸」の代表が名を連ねている。また、奥の展示室には、会沢で明代に鑄銭所が設けられたことを記念して造られたと思われる巨大な「嘉靖通宝」の実物が、無造作に置かれてあった。重さが 41.47kg と、添えられていた説明書に拠れば、世界最大の銅銭だということになる。この記念物により、雲南での銅銭鑄造史が裏付けられる。

地図に見える川陝会館を探すが、その場所とおぼしきところには福祿寺があり、その脇に興味深い石碑があった。「秦」というから、まさに陝西省の出身者が関西会館を建てたという内容の碑で、乾隆辛丑年閏五月の日付が刻まれていた。この碑文は文献史料ではいまのところ確認できておらず、清代の交易史を解明する手がかりを与えてくれる可能性を秘めている。福州会館とあるところは、すでに崩壊。雲南会館は確認できず、文廟は会沢一中の敷地のなかにあり、学校の一部として活用されていた。

銅を北京に運ぶ最初の中継点である娜姑鎮白霧村においても、史跡の調査を行う。いまは寒村になっていたが、三聖宮と呼ばれる文廟(清の嘉慶年間 1796-1820 に創建)、湖広会館として建てられ寿福寺(創建は明末 17 世紀半ば)、清末に建てられたカソリック教会などが残り、雲南銅が清朝の財政を支えていた時期において、雲南から北京にいたる銅搬出路が現地を通過し、繁栄していたことを窺わせる。

これまで日本の雲南における歴史研究は、少数民族に偏っており、銅の搬出ルートについても文献史料に基づいて進められてきたに過ぎない。この研究プロジェクトで、銅交易ルートの一端を調査することで、清朝が政策として進めたルート整備の規模と範囲を確定し、商人グループが果たした役割を研究する端緒を開くことができた。

4. 青海省レプゴン地区宗教行事フィールドワーク

7月9日から20日にかけて青海省黄南チベット族自治州において行ったフィールドワークでは、現

地のチベット族が「ルロ」と呼ぶ精霊に対する信仰に起源を持ちながら多様な側面を有する宗教行事を解明するために行った。この調査は、2003 年度から民族音楽研究者・演劇史研究者とともに共同で進めてきた研究の延長線上に位置づけられる。



「青海省チベット族地区のタカラ貝付き仮面」

この地域の研究が東ユーラシア史構築のために必要である理由は、現在の青海省・甘肅省からチベット高原の東縁部を経由して雲南にいたる民族移動の回廊があったのではないかと、という仮説が提起されているためである。中国民族学・社会学の発展に大きく貢献した費孝通氏が提起した仮説であり、中国古代の史書に見られる羌族が、中原で勢力を拡張する殷・周王朝の圧迫を受け、さまざまな民族に分岐しながら中国西北部から南下したとされる。この仮説が正しいとすると、チベット高原の東縁部に居住する諸民族文化の底流には、一体性があることとなり、これがその後の交易ルート形成を容易にする条件になったと推定することができる。今回の調査では、雲南に居住するチベット族の基層文化との類似点に注意を払いながら、フィールドに出た。

2004年の調査で、サチェ村が信仰の対象とする山峰アニュ=サチョンを祭るルロから、レブゴン地域の各村落のルロが始まることを知り、興味を持っていた。村民からの聞き取りでは、アニュ=サチョンはレブゴンで最高の格を有する山であり、そのために他のルロは先を越して行うことはできないという。サチェ村はラサから中国王朝に対する防護のため派遣された軍隊が、屯田したと伝えられ、ルロの踊りのなかにも、「軍隊の舞」と呼ばれるものが含まれ、武器をかたどった道具が使われるのはそのためであるという。このことは、歴史を読み解く手がかりを与えてくれるものとして芸能を見る場合、個々の行事を解析するばかりでなく、その全体を検討しなければならないことを教えてくれる。

ルロは「ル」と呼ばれる精霊に対して行われる行事であるが、「ル」信仰の広がりについては詳細が分からなかった。本プロジェクトの一環として9月に雲南西北部に赴いたときに購入した魯永明氏の著作⁶⁾が、「ル」信仰を雲南のチベット族も有していたことを示していることに、あとで気づいた。雲南のチベット族の文化は、17世紀にゲルク派(黄帽派)が勢力を雲南に扶植するために、土俗的な要素が強いアニミズム的信仰やボン教・ニンマ派チベット仏教などの伝統を破壊したときに、大きく変容した。そのため精霊信仰は存在しないと考えられていた。しかし、ゲルク派の勢力が直接には及ばなかった山間部の僻村には、「ル」に対する信仰がツァンパと呼ばれる在家の宗教者によって保持されていることが、魯氏のモノグラフに示されている。

青海省での調査成果については機会を改めて公表する予定であるが、興味深い見聞を一点のみ記す。行事の最中に会場となっている広場の入り口に立っていた観衆が少しざわついている。何事

かと思いきや、フェルトの仮面をかぶった男が立っていた。鼻先にタカラ貝を付けており、興味深い。行事に関連する寸劇の一員かと思い、写真を撮っていると、箱をズイと差し出す。祭りにうまくつけ込んだ乞食であったのである。しかし、注目すべき点は、タカラ貝である。モンゴルからシベリアにかけて、シャーマンの服装にはタカラ貝が多用されることを想起すると、この乞食の姿に、日本の民俗学でも指摘される「墮落した神」の姿を認めることができるように感じられた。

本研究プロジェクトとの関連から述べるならば、中央ユーラシアからシベリア高原にひろく展開したシャーマニズムに欠かすことのできないタカラ貝は、南洋に産するものであり、交易によって外部からもたらされた。そのルートとして、東アジア史のなかでは、琉球から中国福建省に渡り、華北を経由して中国西北部に運ばれたと考えられていたが、他にもルートがあった可能性もある。つまりインド洋からベンガル湾に陸揚げされ、陸路で雲南を経由し、チベット経由でモンゴル高原にもたらされるというルートである。

マルコポーロの東方見聞録などでは、雲南でインド産のタカラ貝が通貨として広く用いられていたという記載を見いだすことができる。8月に訪れた建水県の文物展示室では、明代の墳墓から発掘された副葬品として、タカラ貝が陳列されていた。本研究プロジェクトでは、十分に解明することはできなかったが、東ユーラシアをめぐる物産の一つに、銅や銀などとならんでタカラ貝を含まなければならぬことを確信できたことは、大きな成果であったといえよう。

5. 雲南省建水県・石屏県史跡調査

この調査は科学研究費によって行ったものであるが、本研究プロジェクトとも密接に関連するために、ここに記す。

東ユーラシア史の起点となる事件に、1253年のフビライによる雲南遠征がある。ときのモンゴル帝国ハーンであったモンケは、長江を防衛ラインとする南宋を制圧する布石を打つために、フビライに命じて雲南大理を拠点としていた段氏政権を制圧させた。モンゴル軍は現在の甘粛省を出発し、3つの方面軍に別れて南下した。もっとも東よりのルートを辿った右翼は、チベット高原東部を経由して雲南に至っている。このルートは、雲南と中央ユーラシアとを結ぶ主要ルートとも重なるものである。

雲南がモンゴル帝国に併呑された後、元朝支配の要として重視され、在地の諸民族のリーダーをそのまま世襲的な領主として承認する政策が行われた。これが18世紀半ばまで継続される「土司」制度である。モンゴル帝国衰退後に元朝の宮廷をモンゴル高原に駆逐した明朝は、1380年代に大がかりな軍事行動を起こし、莫大な犠牲をはらって雲南を制圧した。これまでの中国史のなかでは、この雲南遠征についてほとんど注意が払われてこなかった。明代の通史でも、数行でかたづけられることが多い。しかし、東ユーラシア史という観点から見た場合、この事件は中国辺境のエピソードとして片付けられるべきものではない。モンゴル帝国後の世界システムにおいて、雲南が地政学にユーラシアの要となっていたことを明示している。

建水は明朝の雲南支配の拠点として発達し、漢族が雲南に活動圏を拡大するときには、その起点ともなった。そのシンボルとして、「南方の天安門」とも呼ばれる1389年に建てられた朝陽門がある。今回の史跡調査では、明代の史跡を中心に確認作業を行った。城壁に用いられた煉瓦には、築造を担当した部隊名のその指揮官の名が記されていることが明らかとなった。こうした実物資料を丹念

に検討すれば、明代の雲南統治の実像に迫ることができるであろう。現在、建水は市街地の再開発が進められており、歴史的町並みが消滅しようとしていた。歴史的な価値を再認識する機運を、緊急に醸成する必要があることを痛感した。

一方、石屏は漢族の商人グループの拠点として発達した。今回の調査では、現地でのみ入手できる資料集などの刊行物を収集することに重点を置いた。入植の歴史が古い漢族村落・鄭営村においても、予備的な調査を行うことができた。

6. 雲南＝四川交易路調査

雲南からチベット高原へと向かうルートは、「大北路」と呼ばれ、四つの主要な路線があった。交易の拠点となった麗江を起点とした場合、一つは麗江を出発して金沙江に降り、石鼓で渡河し、巨甸・魯甸を經由、栗地坪で山越えして維西の保和鎮に入り、そこから瀾滄江に沿って北上、徳欽を経て標高をあげてチベット高原へと入るものである。第二のルートは、石鼓で渡河したあと、金沙江に沿って北西に進み、維西の其宗を経て、徳欽のチベット族が営む宿場町として知られる奔子欄を経て、標高四千メートルの白芒雪山の峠を越え、かつては阿敦子と呼ばれた徳欽の県城に入り、そこから瀾滄江に出て第一のルートに合流する。第三のルートは、麗江から北に道を取り、文海・龍蟠を経て金沙江に至り、渡河してから金沙江の北岸を進み、下橋頭（現在の虎跳峡鎮に）を経てから溪谷沿いに登って中甸に入り、そこから奔子欄に向かって第二のルートに接合する。これらの交易路の雲南における経路については、2004-05年にかけて、走破することができた。

この三つのルートは渡河地点と峠越えのルートは異なるものの、瀾滄江に沿ってチベットの境内に入る。これに対して、第四のルートは、麗江から北東に道を取り、永寧を経て四川省の木里に入り、四川の成都からラサへと向かうルートに合流するもので、理塘・巴塘を経て昌都にいたる。第四のルートはラサに向かうには大きく迂回しているため、距離が長大ではあったが、しかし、瀾滄江に沿った道よりも平坦であったため、このルートをたどる隊商も少なくはなかったという。

この第四のルートのバイパスとして、中甸から東北に進み、大峡谷を経て四川省の稻城にできるものがある。今回の調査では、このバイパスをたどり、メインルートについては機会を改めて、成都から理塘を經由して、麗江に向かうことを考えている。今回の調査の成果の一つは、雲南とは異なる四川省側のチベット高原を見ることができたことであろう。

四川省側は乾燥が厳しく、そのほとんどが草原となっている。チベット族の生業は、放牧と畑作とを組み合わせた定住民と、ヤクとともに移動する遊牧民とに分かれる。この高原から雲南側に下るとき、景観上の重要な変化は、植生である。樹木にサルオガセが絡み付いているのは、まず目に飛び込む変化。植物の種類が格段に増える。四川側では単純な針葉樹林であったものが、雲南側では低木層に広葉樹が混じる。空気が違う。雲南は湿度が高い。たまたま今日はその空気が変化が、霧の有無という眼に見える形で現れていた。これは今日だけの現象ではなく、年間を通して大気中の水分が異なるに違いない。これがサルオガセの有無という植物の変化となる。下って行くにつれ、植生の種類がますます豊かとなる。ナナカマドが赤い実を結び、ダケカンバの幹が風雪のために剥けている。「雲南」とはよくいったものだ。四川から雲南に入ると、まさに雲の多い南の国である。

7. 東ユーラシア史研究成果の公表

東ユーラシアという空間認識について、さまざまな機会を捉えて公表し、多くの研究者と意見を交換するよう努めた。主なものを挙げる。七隈史学会(福岡大学、9月30日)において「地域から環球」というテーマで、雲南のナシ族村落での調査に基づき、芸能のなかに多様な世界認識が含まれていることを指摘した。韓国ソウル国立大学におけるシンポジウム「前近代における世界秩序」(11月3日)では、The World of the Seas and the International Orders in East Eurasia, 1567-1840 というタイトルで、「東ユーラシア」という言葉を提示しながら、海を中心とする世界秩序の歴史的な展開を概観する報告を行った。さらに、台湾で開催された中央科学院台湾史研究所主催の「環境史国際シンポジウム」(11月8-10日)では、「東ユーラシアの生態環境史」という表題を掲げて、環境史の視点から東ユーラシア全域で展開されていた交易の全体像を検討した。中国語の報告論文を作成するために、本研究助成を活用することができた。

8. 到達点と将来への課題

研究助成を得たことにより、1年のあいだに集中的に実地調査を行うことができた。その過程で、歴史研究の一つのスタイルを自覚できたことが、到達点の1つとして挙げることができる。研究成果の一端として学会報告をもとに文章とした論考において、そのスタイルについて、下記のように論じた。

書齋を出て、土地に入って調べる、という手法がある。多少気取った物言いになるが、この手法を「歩く歴史学」と名付けたい。これは史跡を訪ねたり、歴史的な人物にゆかりの土地をたどったりといった、いわゆる「歴史の墓参り」ではない。「歩く歴史学」とは書齋史学をなぞるものではない。あらたな研究のテーマを掘り出し、あらたな研究のパラダイムを創り出すことを、可能とする手法である。この手法は、「国史」(国や民族を単位とし、主に支配者側の史料を用いた歴史)を相対化する可能性を持っている。

「歩く歴史学」を実践するなかで、強く感じられる点がある。自己の身体を移動させることで、それまで通説として語られてきた歴史像を相対化する道が開かれる。世界は一つではなく、多様な世界が併存し、干渉しあう。無数の世界が織りなす物語として、歴史を見直すことが、「歩く歴史学」の一つの帰結であるように思われる。近年、歴史学界では「辺境」「マージナル」「越境」などの視座が、相次いで提起されている。「歩く歴史学」は「辺境からみる歴史」の視座を発展させる本稿では、辺境という視座をさらに発展させ、歴史の本流に位置づけることを可能とすると、筆者は考えている。

辺境に生きた人は、多くの場合、文献を残さない。それは、中央が地方を管理するために文字が発明されたという本質に由来する。そのため、辺境の人々の内面のなかにあった世界像に対する検討は、ほとんど行われていない。彼らは、おそらく自分たちが「辺境」に居るのだとは認識していない。ならば、どのような世界だったのであろうか。その世界像を再構築する一つの手がかりは、口承される芸能のなかにある。

雲南はオーソドックスな歴史叙述のなかで、常に「辺境」として位置づけられており、この意識は雲南現地の歴史研究者のなかにも深く浸透している。しかし、「歩く歴史学」を実践することで、雲南が東ユーラシアという枠組みでは、さまざまなモノ・ヒト・情報の行き交う場であったことが、浮かび上がっ

てきた。碑文などからもその交流の様相が浮かび上がってくる。さらに、文字化されていない事象は、建築物・装飾品などの物質や日々繰り返されてきた生活習慣、口頭で伝承される民間芸能などを手がかりとして再構成することが可能である。

到達点の第2には、調査地における聞き取りや遺物などから、東ユーラシア史を具体的に構築するために、これまで検討してきた茶葉・塩・銅などのほかに、タカラ貝・麝香・銀などを追加する必要であることが明らかとなった。特にタカラ貝を検討することで、インド洋からシベリア高原にいたる物資の流れを解明できるかもしれない。

学会などで東ユーラシア史の構想を紹介したときに、新たな歴史研究のパラダイムとして歓迎される一方、雲南を中心としている点で、批判を受けることが多かった。本研究プロジェクトのタイトルでも「雲南をコアとする」と掲げたが、中心あるいはコアという言葉からは、政治や経済のセンターというイメージが連想される。モノ・ヒト・情報の多数のチャンネルが交差点というニュアンスを持たせるためには、不適切であったかもしれない。批判を受けて考察を深めるなかで、石切のたとえを想起した。岩を割るときに、名工は岩の「目」に鑿を当てるといふ。目をあやまたずに一撃すれば、いかに硬い岩であっても割れる。雲南は、歴史的に形成されてきた空間における「目」にたとえられる。

本研究プロジェクト申請のときに掲げた目標は、「雲南を範囲とする交易路を、できるかぎり本来のルートに沿って踏査することを目的とする。調査地点では、チベット族・タイ族など多様な民族の歴史を交易の視点から解明するとともに、交通路を行き来したキャラバンの実態に聞き取りなどの方法で迫る。また、関連する文献を収集し、東ユーラシアというヴィジョンを具体化し、調査においては映像など多様な媒体で記録にとどめ、将来の映像を用いた新しいヴィジョンの提示に活用する」というものであった。

プロジェクトを終了するにあたり、その到達点を検討すると、交易ルートの踏査については、タイ族などが居住する雲南西南部については、ほとんど手つかずのまま残された。この点については、今後、東南アジアのメコン川流域諸国を、その地域の歴史を専攻する研究者とともに、実地調査を展開してゆく。キャラバンに関する聞き取りについては、伝統的な交易について記憶する老人の多くがすでに死去しており、きわめて困難であることが明らかとなった。他方、交易路沿線の村落に残る歌謡などに、交易の様子を窺わせるものが多いことが確認された。将来は民族言語・歌謡などの研究者の協力を得て、フォークロアの手法を用いて研究を進めてゆきたい。碑文などの史料や中国で出版された資料集・研究書については、現時点で手に入るものは網羅的に収集することができた。現在すでに文献・史料にもとづき、新たな歴史像を提起すべく研究をすすめている。また交易ルートの写真や芸能のビデオを収録することができ、研究成果を発表するときに活用したい。

近日中に、青海省チベット族の芸能については、雲南との関連を踏まえつつ著作としてまとめる予定である。東ユーラシア史については、1253年のフビライによる雲南遠征を起点に、1842年のアヘン戦争終結後の南京条約締結を終点とした歴史的な流れを、最初に編年体で通観する著述を検討している。

[1] 杉山正明『クビライの挑戦』朝日新聞社、『遊牧民から見た世界史』日本経済新聞社、1997年ほか。

- [2] 杉山氏の明朝・清朝に対する評価は杉山正明『疾駆する草原の征服者』講談社、2005年などで開陳されている。
- [3] 上田信『海と帝国:明清時代』講談社、2005年
- [4] 上田信『東ユーラシアの生態環境史』山川出版社、2006年
- [5] 文部科学省科学研究費(基盤研究 B)「近現代アジアにおける『健康』の社会経済史—疾病、開発、医療・公衆衛生」(研究代表:大阪市立大学、脇村孝平)。
- [6] 魯永明『魅力尼汝:来自香格里拉藏族生態文化村的報道』民族出版社、2005年。この著作はシャングリラ県東北部に位置するチベット族山村に関する文化人類学的なモノグラフである。
- [7] 上田信「地域から環球へ:雲南ナシ族の歌謡を例に」『七隈史学』8、2007年